

普遍論争 –ヘレニズムとヘブライズム–

「普遍論争」とは、中世ヨーロッパにおいて、普遍の实在をめぐって争われた哲学的・神学的論争のことである。ここで争われている「普遍」とは、「個物」に対応する語であり、それは個物の種や類を意味する。例えば、ここに一人の学生 A と、彼が飼っている柴犬 B がいたとしよう。この場合、個物である A は「人間」という普遍に属し、同じく個物 B は「犬」という普遍に属する。すなわち、普遍論争とは、この「人間」や「犬」といった普遍は果たして实在するのか、それともそれは単なる表象にすぎないのか、これらをめぐる論争だったのである。この論争は主に三つの論点から争われた。「実念論」は、普遍は個物に先立ち、個物とは別に存在すると主張する。先の例で言えば、「人間」や「犬」といった普遍が存在して、はじめて学生 A や柴犬 B の存在が成立するのである。これに対して「唯名論」は、普遍は個物よりも後であり、普遍とは単なる名前であって存在しないと主張する。この立場では、学生 A や柴犬 B がまず始めに存在し、「人間」や「犬」は単にそれらを表象する名前にすぎない。そして第三の立場である「概念論」は、普遍は個物の中にあり、普遍とは個物に依拠する抽象的・概念的な存在であると主張する。すなわち、学生 A や犬 B といった实在の中に、「人間」や「犬」といった抽象的概念が存在するのである。

しかしながら、普遍論争、とりわけ「唯名論」と「実念論」の対立の背景には、ヨーロッパ世界における二つの思想源流である「ヘレニズム」と「ヘブライズム」が大きな影響を与えている。この二つの思想における世界観は対照的である。例えば、ギリシア文化、およびギリシア思想を中心とする「ヘレニズム」にあっては、プラトンのイデア論に代表されるように普遍が重んじられる。確かにアリストテレスは師であるプラトンを批判して、個物を重視したが、それはあくまでも普遍を内在した個物であって、これはどちらかと言えば、普遍論争における「概念論」の考え方に近い。一方、ユダヤ教、キリスト教思想を中心とする「ヘブライズム」にあっては、世界は無から創造されたものであり、人間もまた神の創造物である。よって、いかなる普遍にも先立って、まず個が存在するのである。

しかし、この「ヘレニズム」と「ヘブライズム」をもう少し深く、例えば、両思想における神（超越者）と人間の関係について分析すると、また違った見方ができる。ギリシア文化は言うまでもなく多神教の世界である。そこではユダヤ教、キリスト教における神のように、神に全知全能を求める事はない。神は個々にそれぞれの役割を担っている。－太陽神アポロン、美の神アフロディーテ、海神ポセイドン－したがって、ギリシア人にとって重要なのは個々の、個物としての神であって、彼らにとって普遍性を持った「神」というものは意

味を持たない。それでいながら、ギリシア人は人間には個物である事を求めない。多神教であるがゆえに、人は己の神を選んで信仰する事ができる。キリスト教のように信仰か否かの二者択一を迫られる事がない為に、個人によるところが少ない。「ヘレニズム」にあっては、神は個物である事が重視され、それに対する人間は普遍で構わないのである。一方、一神教であるユダヤ教、キリスト教にあっては、神は創造主であり全知全能の存在である。したがって、神には普遍性が求められる。というより、普遍的な存在にならざるをえない。そして人間は、その絶対の唯一の神に対峙する事を求められる。あくまでも人は個人として神の前に立つのである。旧約聖書「ヨブ記」において、ヨブが神に問うたのは人類の罪ではなく、あくまで己自身に罪があるか否かを問うたのである。「ヘブライズム」にあっては、神は普遍であり、それに対峙する人間は個物である事が求められるのである。

ローマ帝国がキリスト教を国教とし、そして中世ヨーロッパにおいて、そのキリスト教が絶対的な影響力をもった時、普遍的な神と、それに対峙する個物としての人間という図式が生まれるのは必然であったと言える。「普遍論争」は、この個物としての人間である「我」の発見であった。そしてローマ＝カトリック教会にとって、普遍的な神というのは教義上、好都合であった。こうしたカトリックの普遍主義に対して後に宗教改革が起るが、にもかかわらず、ルターやカルヴァンが聖書中心主義を唱え、その信仰のよりどころをあくまでも個人に求めたところを見ると、彼らもまた「ヘブライズム」から脱却できなかったと言えるだろう。